

笹川記念保健協力財団 奨学金支援

助成番号：2016-

(西暦) 2017 年 3 月 13 日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団

理事長 喜 多 悦 子 殿

## 2016 年度奨学金支援

## 完 了 報 告 書

標記について、下記の通り完了報告書を添付し提出いたします。

### 記

所属機関・職名 鹿児島大学医学部 島嶼・地域ナース育成センター

氏名 金子美千代

## 1. 修学した内容

後期では、臨床薬理学、看護管理・政策論、精神看護学演習、国際コミュニケーション教育論、生活習慣病特論を学んだ。

臨床薬理学では、対象（精神・神経系・呼吸器系・循環器系・消化器系・妊婦・授乳婦）の治療薬における判断とその根拠、使い方について学ぶことができた。また、抗菌薬化学療法と感染制御の実際的な薬剤の使用についてや、医薬品の実際的な情報や管理・取り扱いの基本を学ぶとともに、その根拠となったエビデンスを理解することができた。新規薬剤の臨床治験・薬剤の法的取り扱い・安全管理についても学ぶことができた。

看護管理・政策論では、看護管理の歴史の変遷、看護管理の基本概念と理論を学んだ。また、看護管理に関する研究について、概観することによって看護管理の現状と課題について学ぶことができた。それにより保健医療福祉に携わる人々への調整を行い、良質なケアを提供するための効果的な看護管理の在り方について再考することができた。

政策論では、基本となる諸理論を学んだあと、保健医療福祉の政策過程、政策形成に関する方法論を学ぶことができた。実際に、鹿児島県の訪問看護の現状について分析し、政策立案を行った。鹿児島県で訪問看護ステーション連絡協議会に加入するには医師の許可が必要であることから、訪問看護師間のネットワーク構築を図りにくい現状がある。その件について代替案を考案しグループで討議することで、政策提言についての理解を深めることができた。

精神看護学演習では、精神の健康問題に関する看護、並びに患者—看護師関係の在り方、精神障害を持つ人々の体験等をテーマとする国内外の文献を購読し、精神看護の対象や看護の特性、また看護実践法における特性等を明確にし、精神の健康問題の予防と回復のための看護をどのように行う必要があるのかについて討論し、探求することができた。

国際コミュニケーション教育論では、諸外国の保健医療制度と人的資源、言語教育および看護教育制度について学ぶことができた。また、アメリカと日本の医療に対する考え方や基本的な文化の違いを知ることができた。Abstract の分析も学ぶことができた。

生活習慣病特論では、生活習慣に起因する疾患である心臓病や胃がんや大腸がん、肝硬変などの臨床病態と遺伝的要因と予防法について学んだ。また、高齢者のフレイル（虚弱）や高齢者総合的機能評価（CGA）についても学ぶことができた。高齢がん患者に CGA を用いることにより①治療可能な状況の早期発見②薬剤の整理③適切な介護の選択④身体・精神・社会的状況の改善④医療費の節約など、患者の満足度の向上が得られると期待されているということが理解できた。さらには医療者側への効果としても①がん診療連携拠点病院において専門医療（家族への支援を含む）の提供②入院から外来、在宅・緩和医療へのスムーズな連携③チーム医療の形成などが期待されており、CGA は適切な医療を提供するための支援に繋がると考えられている。在院日数は短縮される中で、早期に治療の方向性を導き出すためには看護師も GCA の視点を持ち、患者・家族を多角的にアセスメントすることが求められていると考える。医師が患者・家族と早期に検討できるよう、看護師は診療の補助と日常生活支援という日々の業務にとらわれず、患者・家族のこれまでの「生活

をみる」視点を強化して関わる必要があるのではないか。患者・家族がどのような場所でどのように暮らしてきたか、何を大切に生きてきたのか、これからどのように生きたいと考えているのか、どこまでの治療を望んでいるのか、また、受けたくない治療はどのようなものなのか等の情報を整理し、医師へ情報提供することができたら、病気を治すためのキュアと病気を抱える人を全人的に捉えるケアとが融合でき、人々の尊厳を守ることのできるバランスのとれた医療が可能になると考える。

## 2. 学びをどのように研究や仕事に生かしていくか

これからの看護には、人々の多様なニーズを捉え、保健医療福祉システムの変革や複雑な健康問題に柔軟に対応する能力が要求されているため、様々な分野から看護を再考することはとても重要であると考えます。また、海外の活動について調べ・まとめ・発表することで日本の活動を俯瞰することができた。看護の対象は人間だが、どこかで「日本人だけ」という認識になっていた自己の価値観にも気付けた。今後は、看護の対象は様々な国籍の方であることを念頭に、様々な国籍の文化の概念を看護に取り込み、対象理解に繋げたい。今回、様々な課題が与えられ探求する中で、改めて自分自身の知の偏りを痛感した。また、文献レビューを行う中で、クリティーク能力が不可欠であることにも自分自身気付いたのが今後の課題としたい。